

英語教育における異文化理解

— シラバス構成の一視点 —

金田 道和*・福田 良子**・福田 隆眞***

Cross-cultural Understanding in EFL
—A Prospect of Syllabus Design—

Michikazu KANEDA, Ryoko FUKUDA and Takamasa FUKUDA

キーワード：英語教育 異文化理解 テーマ・シラバス

Key words: EFL Cross-cultural understanding Thematic Syllabus

In this paper we present a review of PETS series approved by the Singapore Ministry of Education with a view to obtaining their designing ideas for incorporating cross-cultural understanding in the teaching of English to their primary school children. Since the Course of Study for the Junior High School by the Japan Ministry of Education has not stated yet in any concrete terms what the teaching of English to junior high school children must incorporate in its syllabus regarding the area of cultural understanding, we have in front of us a very important and complex task through which our future EFL teaching hopefully comes to grips with this idea integrated in the syllabus and then into the future textbooks. Upon reviewing the PETS series, we have found the following:

- (1) The thematic idea of designing syllabus for the learning of English may provide an alternative way in preparing the EFL materials in Japan.
- (2) The PETS have a very wide selection of information regarding foreign lands and countries.
- (3) The PETS provide true pictures of the people using English as their first language.

1 はじめに

英語教育において異文化理解は、その目的論において必ず取り入れられてきた要件である（金田、1979, 1999）。異文化への理解は目的論の中では、実際に学習対象言語でコミュニケーションができることに次いで、取り入れられてきた世界的な経緯がある。わが国の英語教育においても、特に、戦後の英語教育を例にとるならば、中村(1992)にも明らかのように、昭和26年の文部省指導要領（試案）にも明確にそのことの重要性が謳われている。

*金田道和 英語教育専修・国際理解教育教室 **福田良子 山口市立大内中学校
***福田隆眞 美術教育専修・美術教育教室

しかしながら、異文化理解を学習対象とすることについては、「何を、どのように」ということに関しては、殆どその実態が無いままに推移してきている。国際理解教育が教育の一つの目標になってからすでにいくらかの時間が経過している。小中学校の「総合的学習の時間」に国際理解は一つの項目として挙げられているが、「何を取り上げるか」についての具体的指針はどこにも示されてはいない。教授・学習という営みが行われる限り、そこに「シラバス」は存在する。異文化理解、特に、英語教育の中におけるそれは、これまで「結果として」存在したという面はあるかも知れないが、明確な意図と指針をもって、例えば、教材化されたことは無いと言ってよい。

そこで、本小論では、英語教育の中において異文化理解を学習対象にする場合、「何を取り上げるべきか」に関わって、将来の教材化のための「構造」を模索することを試みてみたい。

現状では、「異文化理解の内容」について、例えば、指導要領に示されている「言語材料」、あるいは、「言葉が使われる場面や目的」のような具体的な例示は何もないで、一つのサンプルとして、シンガポールの文部省発行のシンガポールにおける英語教育の教材を通して、「異文化理解」のための教材の「構造」を探ってみることとする。

シンガポールを取り上げるのは、幸いにして同国の文部省発行の英語のシラバス、並びに、それに従って作成された小学校用の教科書が入手できたことが一つの理由である。勿論、それに加えて、シンガポールという国は中国系、マレー系、インド系を中心に、多民族、多言語国家であることから、異民族相互のコミュニケーションは、国全体の政治、経済、産業、教育をはじめ、社会生活全般に亘って、必要欠くべからざる要件となっていることから、異文化の理解は格別に学校教育の教材に、その要件を反映していると思われるからである。

そこで、シンガポール文部省発行の English Language Syllabus(Primary)、および PETS(Primary English Thematic Series)を資料として、教材の構造を取り出してみる。

2 PETS にみるテーマの在り方

PETS はその題名が語るように、Primary English Thematic Series となっており、テーマをベースに構成された教材を用いて、シンガポールの小学生に英語を教えようというものである。

2-1 シンガポールにおける英語の位置付け

English Language Syllabus(Primary) (1991:1) (以後 ELS と略) によれば、「英語は教育言語」としてあり、国が定める学校教育のカリキュラムにおいては、“a first language” すなわち、「一つの第一言語」と捉えられている。The first language であれば、「唯一の第一言語」という意味であり、我々日本人の場合には、これは「日本語」ということになる。この「一つの第一言語」という位置付けは、Lamendella(1977)のいう primary language の考え方へ沿うものと言える。

シンガポールにおいては、福田 (1998:78) に報告されている通り、中国語、マレー語、タミール語を第一言語とする人々が国民の殆どを占めている。従って、それぞれの家庭において子供達はそれぞれの民族言語を当然まず習得するが、複合多民族社会であるシンガ

ポールでは、これら多民族を繋ぐリングア・フランカ(*lingua franca*)として英語が使用されている環境において、子供達は民族言語とあわせて英語を「第一次言語 (primary language) としてインフォーマルに習得しているであろうという事情を了解しておく必要がある。そして、小学校に入ると教育・学習のために使用される言語が英語となる。従って、シンガポール文部省発行のELSの冒頭に、「一つの第一言語」としての位置付けを英語が持つという説明があるのは納得のいくところである。事実、「教育言語としての英語」の説明は、「1987年以来、第二言語および宗教についての知識のような科目以外は、すべて英語で教育を行っている」(同所)と続いている。

ELSは確かにシンガポールの小学校における英語教育のための指針を示している書物であるが、これを日本の「外国語としての英語教育」と直に対比して読むことは慎まなければならない。ELSは「第一次言語としての英語」の教育のための指針を示している。日本の学校教育の場面に準えるならば、ELSが示しているものは、「外国語教育」というよりは、当然ながら対応概念は無いのであるが、むしろ「国語教育」に近い捉え方をすることが妥当であろう。

しかし、同時に、英語を自然習得をしたアメリカやイギリスの子供達が、学校で「母語教育」を受ける際に「英語」を学習するのと、シンガポールの小学生が「英語」を学習するのを同列にとらえることも適切ではない。シンガポールの小学生は、学校における「英語の授業」を通して、なお「習得」の過程をも辿っているとみるべきであろう。これは、大変興味ある問題で、シンガポールにおける小学生の英語学習が、母語習得と外国語学習の2極の間のどの辺りに位置付けられるものか、稿を改めて追及を試みたい。

結論として、シンガポールの小学校における「英語教育」は、母語習得と母語学習の両者の性格を同時に持つており、外国語としての英語学習とは一線を劃して捉えるべきものとなろう。しかし、併せて「人為的言語資料」を系統的に提示することを通して「英語」を習得、学習させる点においては、外国語学習に類似する側面も持っている。これを基本に据えてELSに示された「テーマ」をみてゆくことにする。

(1) テーマの設定とそれが持つ意味

ELSの第3章(25-31)はテーマ、トピック、サブ・トピックを挙げている。

次の2ページに福田(2000)よりテーマ等の一覧、テーマ別に、PETSに収められている実際のレッスン(Units)の配置を示す。(別表1、2)

別表1は横に6「テーマ」を示し、各々の欄にテーマ毎のトピックとサブ・トピックを示してある。ELSによれば、これらのトピック、サブ・トピックは例示であり、これら全てを提示する必要はないし、教師がさらにトピック、サブ・トピックを補ってもよいとしてある。(ELS: 25) 別表2は、テーマを横軸に示し、縦の欄には、PETSの各ユニットのタイトルを示し、それを1年生から6年生までに分けて提示してある。各テーマ、および、サブテーマが各々の学年でどのように取り上げられているかが一覧できる。

Suggested Themes and Topics
(English Language Syllabus, 1991, pp.27-31)

(表 1)

Themes	The World of Personal Relationships	The World of The Community and the Nation	The World of Other People	The World of The Imagination	The World of Science and Technology	The World of Nature
	Self *background information *appearance *personal health *thoughts and feelings *character and behaviour *hopes and aspirations *values *interests and experience	Neighbourhood/Community *physical environment *recreational facilities *social cohesion/ togetherness *community services *neighbourhood *values of the community *current events/ developments	Our Immediate/ Neighbours *getting to know our neighbours *regional co-operation People of the World *international understanding and cooperation *interesting people *stories from other lands *personalities	Mysteries *outer space *monsters *strange disappearances *miracles The supernatural *magic *ghosts *superstitions Fantasies *fiction *the subconscious *imaginary trips and experiences	Discoveries *everyday appliances *medicine *food Machines *inventions *how machines work *usefulness of machines Occupations *manual *professional *business	The Natural Environment *prehistoric times *things around us Environmental Concerns *pollution *conservation Natural Disasters *land *sea *weather elements
	Family and Kin *family routines *the home *special occasions *family relationships *roles and responsibilities *kinship terms	Nation *geography *history *culture *national values as embodied in the national pledge, flag and the national anthem	Impact of Other Countries *lifestyles *fashions *behaviour *technology	Famous People *in medical science *in industries	The Wonders of Nature *the rainbow *the tides *snow *day and night *insects *plant life *the seasons	
Topics	Cultural ties and traditional values	Friends *choice of friends *experience of friendship *importance of friends *animals as friends *ideal friends	Current and Future Developments and Their Impact on People *in medical science *in industries			

題材分類
(Primary English Thematic Series, 1A-6B)

(表2)

Themes	The World of Personal Relationships	The World of The Community and the Nation	The World of Other People	The World of The Imagination	The World of Science and Technology	The World of Nature
1 年	Unit1 About Me Unit2 My Friends Unit3 My Family Unit6 Animal Friends Unit7 In the Garden Unit9 Animals in the Zoo	Unit4 People in My Neighbourhood Unit5 Places in My Neighbourhood Unit8 Fruit and Vegetables Unit10 Moving Around Unit11 People at Work		Unit12 Meanies and Monsters Unit13 Giants and Dwarfs Unit14 Fairy Tales and Rhymes Unit15 Magic and Magicians		
2 年	Unit1 Helping Friends Unit4 Wishing Wells And Magic Spells Unit6 Caring And Sharing Unit7 Happy And Sad Unit13 Collecting Things	Unit2 Time To Celebrate Unit3 Clothes And Costumes Unit9 Sound Around Us Unit12 From Plants To Us Unit14 Beat And Bake		Unit5 Wonderful Adventures Unit8 Knights And Dragons	Unit15 Out And Make	Unit10 Creatures Big And Small Unit11 Colours Around Us Unit12 From Plants To Us Unit16 Fire! Fire!
3 年	Unit1 Smart And Good Unit2 Playing Games Unit9 Houses And Homes	Unit3 Fit And Well Unit7 Signs And Signals Unit16 Be Prepared	Unit10 Our Neighbours	Unit6 Myths And Legends Unit13 Strange Happenings	Unit8 Paper Unit15 Robots	Unit4 Colourful World Unit5 Along The Seashore Unit11 Animals And Their Ways Unit12 Prehistoric Animals Unit14 Unusual Plants
4 年	Unit1 Feelings Unit2 Pets And Pests Unit14 Making Choices	Unit3 Favourite Pastimes Unit4 Outdoor Activities Unit11 Then and Now Unit13 Food, Glorious Food		Unit6 Tricks, Jokes and Riddles Unit9 Detectives, Clues And Suspects Unit15 Knights, Ladies And Castles	Unit7 Science and Scientists Unit10 Explores Unit12 Whats On?	Unit5 Rain or Shine Unit8 From the Sea
5 年	Unit10 All in the Family	Unit3 Curtain Call Unit11 Front Page	Unit1 Shipwrecks and Pirates Unit2 Whats My Line? Unit8 Courageous People Unit12 Travels and Travellers Unit13 Unusual Characters	Unit4 Into Space Unit9 Whos Afraid?	Unit5 Inventors and Inventions	Unit6 Keep Our Earth Green Unit7 Dont Let Them Die Unit14 Time
6 年		Unit4 School and You Unit6 Special Events	Unit3 To Conquer and to Overcome Unit6 Special Events Unit7 Sports and Games Unit10 Music and Dances	Unit1 Enjoying Fiction Unit2 Words, Words, Words	Unit5 Computers in Our Lives	Unit8 Circles and Cycles Unit9 Disasters and Emergencies

このテーマの設定は、6つのメインテーマと各々のテーマごとのサブテーマという構成になっているのは一覧表から読み取れる通りであるが、その内容の概要をあげてみると次のようである。

第1のテーマは“*The World of Personal Relationships*”(人のつながり)である。このテーマの下におさめられている下位範疇は、「自分自身(Self)」、「家族と親族(Family and Kin)」、「友だち(Friends)」である。「友だち」の範疇は、動物および植物をその中に収めている。

第2の範疇は、“*The World of the Community and the Nation*”(地域と国)である。その下位範疇は、「地域」と「国」でそれぞれは、自然／人為環境、施設、組織、地域サービス、弱者への配慮、から、地理、産物、歴史、歴史上の人物、国民の生活・文化・宗教・教育へと話題が展開している。

第3の範疇は、“*The World of Other People*”(他国の人々)である。その下位範疇は、「近隣の国々(Our Immediate Neighbors)」、「世界の国々からのインパクト(Impact From Other Countries)」で、前者は、近隣諸国との友好、親善、協調が挙げられ、後者では、国際理解、衛星通信、外国の風物、技術、慣習、物語りなどがサブテーマとして取り上げられている。

第4の範疇は、“*The World of Imagination*”(想像の世界)である。下位範疇は、「神秘・不思議」、「超自然現象」、「ファンタジー」が挙げられ、世界各地の不思議や奇跡、マジック、おとぎ話、民話、S F、他の惑星のお話などが収められている。

第5の範疇は、“*The World of Science and Technology*”(科学と技術の世界)である。下位範疇は、「発見」「発明」「科学／技術上の重要な人々」、「科学・技術の将来」となっている。

第6の範疇は、“*The World of Nature*”(自然界)である。下位範疇は、「自然環境」、「環境への配慮」、「自然災害」、「自然の不思議」である。

このテーマ、サブテーマの設定の在り方から明らかなのは、「子どもたちのまわりの世界」が6つのテーマを中心に切り取られているということである。すなわち、冒頭でも述べたように、このテーマやサブテーマをもとに組まれた教材(PETS)は、「ことば」として英語を、しかも、“a first language”として学ばせるためのものである。

「ことば」は私たちのまわりの森羅万象を表現する手段であってみれば、このテーマの設定はまことに自然そのものと言える。テーマの一つ一つは、日本流に言えば、「社会科」であり、「理科」である。また、「国際理解学習」であり、「環境学習」でもある。しかし、このテーマでもって、そのような「学習」は意図されていない。これらは、あくまで「ことば」の学習のためのものであることが明言されている。

「ことば」は真空の中では学習することはできない。したがって、語彙、文法などは当然学習対象になるが、これを「実際にことば使われる生活場面」に置いて「学習する」ことが肝要であるというプリンシブルをこのELSは主張している。「実際にことばが使われる生活場面」として、これらのテーマは設定されており、決してテーマ自体の学習が目的とはなっていない。次の引用は明確にこのことを述べている。

“Themes and topics serve as the context for using the English language to talk, read or write about something. A comprehensive or academic knowledge is not expected of the pupils. … Here it must be stressed that the themes,

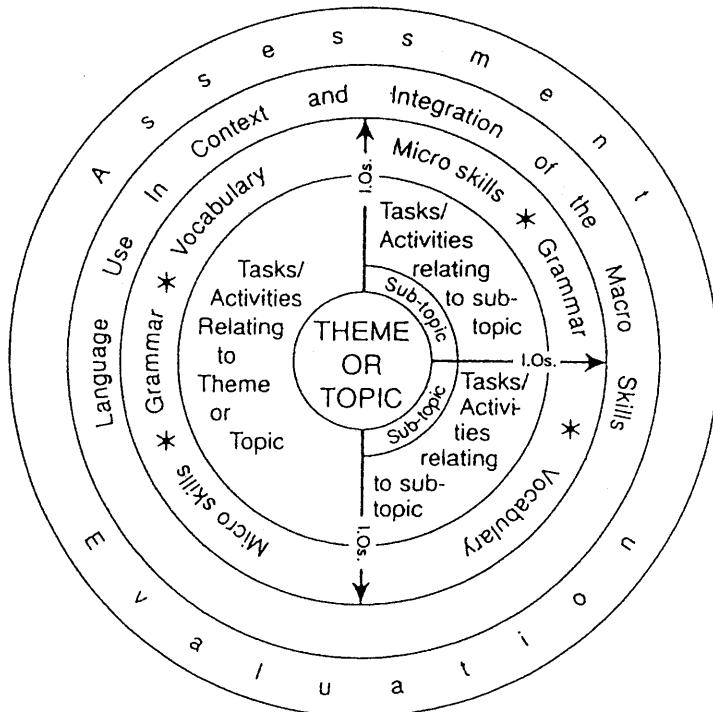
topics and sub-topics are only the means to an end, the end being the mastery of the English language, ie(sic) the grammar, vocabulary, and skills needed for effective communication. (下線は筆者) (ELS:25)

最後に付言するならば、これらのテーマは子供達の「身近」から発して「より遠くの世界」へと展開していく設定になっている。

テーマ、トピックを中心に展開するシラバスの構成は、ELSに掲げられた次の図がそれをよく表わしている。テーマやサブトピックに適合した「タスク」を設定し、そのなかで、「マイクロ・スキル」(=文法、語彙をそのうちに含む4技能の学習)と、それを一步進めて、現実の言語使用場面により近い「マクロ・スキル」(=ことばの使い方)を練習するようになっている。

これは、言語材料を中心に編成する「文法シラバス」とは当然異なるし、ことばの「使用場面」を中心とする「場面シラバス」あるいは、ことばの「使い方、機能」に焦点を当てる「機能シラバス」とも異なる。ELSにはその命名はないが、これに名付けをするならば、「テーマ・シラバス(Thematic Syllabus)」とでも呼ぶのが相応しかろう。テーマを中心にして、子供達の成長に合わせたシラバスができるがる仕組みになっている。コードの体系をのみ学ぶのでも、ことばの機能を「想定しながら」学ぶのとも異なる学習ができるはずである。“English as a first language”という規定に相応しいシラバスになっていると言うことができる。

(図1) (ELS: 15) より転載



(2) テーマ、トピック、サブトピックに見られる「異文化」

それでは、a first language習得の教材に盛られた「異文化」はどのような姿をしているのかについて概観してみる。

冒頭に述べたように、シンガポール自体が複合文化社会であるため、教科書には1年生の初めから「自国のもの」として、中国系、マレー系、インド系のイラストが基本的な「情景描写」として登場する。また、「記述」の内容も3グループを意識してなされている。ここでは、これらは「異文化」の範疇には加えないこととする。表3に「異文化」の現れ方をまとめてあるので参照願いたい。

(表3)

学年	ユニット数	扱われている異文化（国や地域）
1	1	Rhymes おとぎ話（ヨーロッパ、イギリス）
2	2	イギリス、ロシア（民話）
3	4	アメリカ、中近東、アラスカ、欧米、ベトナム、インドネシア、フィリピン、ビルマ、マレーシア民話（アンデルセン）、ギリシャ（神話）、オーストリア、イギリス、ロシア
4	3	イギリス、フランス、イタリア、中国、アメリカ、ヨーロッパ、インド、日本、（アーサー王伝説）
5	12	ペルシャ、中国、ドイツ、イギリス、アメリカ、フランス、イタリア、ブラジル、モーリシャス、シベリア、インド、ギリシャ、モロッコ
6	8	フランス、アラビア、エジプト、英米、日本、チベット、ベトナム、イギリス、バルチック海、フィリピン、インドネシア、インド、アフリカ

この表から明らかなように、小学校において扱われる国や地域の数は大変多い。このような国や地域のことについて「テーマ」ごとに題材が設定されるのであるから、シンガポールの小学生の「世界」はいきおい広がらざるを得ない。

初めに「国や地域ありき」ではなく、テーマやサブトピックに従って、適切な題材が取り上げられたその結果がこの表に見る通りとなる。

大変多くの国や地域、従って、異なる文化が取り上げられていることになるが、一つの特徴として、旧宗主国の伝説、ライム、物語りが「読み物」の材料として一貫して取り上げられている。英語という言語を学ぶのであるから、当然といえば当然であるが、a first languageとしての英語話者として小学生を育てようというカリキュラムにおいては成る程と思わせるものがある。単に、「リングア・フランカ」としてシンガポール英語をターゲットとするならば、「英國語」色はもっと後退しているかと想像するところもあつたが、実態はそうではないことが分る。

3 英語教育における異文化理解

外国语としての英語教育における異文化理解は、学習指導要領にずっと取り入れられてきた（金田、1999）。しかし、どのような内容を組み込むことが必要かは、具体的に明らかにされた試しはない。実態は、英語教師が直感的に、また、経験的に時に応じて「文化について」語ってきた。これは、日本に固有の問題ではなく、英國や米国、ヨーロッパ諸国においても同様であることが Byram(1989)の第3章に述べられている。言語教師は「ことば」を教えることにまず関心があり、その言語を使用する人々の文化には教授者としては手を出しかねてきた経緯があるようである。Brumfit(1984)に記述されているインドのプロジェクトは「外国语の環境でコミュニケーション・ティーチング」が成功したと報告しているが、これは、いわば、culture-free な言語学習と特徴づけることができよう。我々が日本で行っている英語教育は中等普通教育の中に位置付けられる英語教育であり、単に、「英語の操作ができる」と目的とするものではない（金田、2001、印刷中）。

今我々が直面している課題は、「異文化（英語文化）」を学ぶ対象として、これをどのようにターゲット文化から切り取り、教材化するかということである。Byram(1989:45-46)に興味ある「異文化理解学習」の内容についての記述がある。

“The content of the course is man in his particular manifestation in French culture: the particularity of French culture as a dimension of the humanity of people born and raised in it. Three questions are fundamental: in what ways does the cultural dimension of their nature make people French and not British, or French not Japanese, for example? How can people who are, in a similar way uniquely British understand French culture and communicate with French people? How might this experience of French people and culture affect British people?”（下線は筆者）

下線のBritishをJapaneseにFrenchをEnglish/Americanに、Japaneseを、例えば、Chineseに入れ替えて読むと、日本における外国语としての英語教育の「英語文化」理解学習の内容についての「選択基準」の一つの例とみることができる。English/Americanのところは、native speakers of Englishとするのがより正確である。

また、Byram(1989:73)は、Andersen and Risagar(1981)を引用して、コンテンツとして取り上げるべきものをターゲット文化の人々の（1）行動、意識（話題、規範、価値観）、（2）言語或いは非言語による相互作用（社会的関係の性質、世代間の役割）、（3）その国（地域など）に関する明示的な情報（歴史、地理、現在の有り様、社会の有り様）としている。さらに、コンテンツを取り上げる際の留意点を6つ、Huhn(1978)から引用している。何れも、「異文化理解学習」のシラバスを構想する場合、そのスタート・ラインとしては納得のゆくものである。

3-1-1 ELSから得られる示唆と今後の課題

ELSは繰り返すように、a first languageとしての英語の学習を目指すものであるので、「外国语としての英語学習」にそのプリンシプルを直接写しかえることはできない。しかし、幾つかの点において我々に示唆を与えるところがある。

それは、第一に「テーマ・シラバス」の考え方である。わが国の英語教育のシラバスは、「文法シラバス」に始まり、現在もその枠組みから離れてはいない。近年、文部省検定教

科書は、「場面」、「機能」を視野に入れた教材作成原理を取り入れつつある。しかし、「場面」や「機能」は現実の言語使用環境が「実感できて」はじめてその威力を發揮するところがある。第2言語として英語を学習・習得する環境においては、これらのシラバスはその目標を達成できる見込みが大きいが、「外国語として」という制限の中では、どうしてもその場面や機能を「想定」した上で学習を進めなければならないところがある。そして、何よりも、「外国語としての学習」には「言語資料」を計画的に、段階付けて提示するという要件は必須となり、常に「学習者」に「英語のシャワーを浴びせる」ことは実現困難であり、また、学習そのものが「第2次の動機づけ」に頼らざるをえない。

シラバス構成原理を「テーマ」に置いてみると、小学生、中学生、高校生それぞれの発達段階に応じてテーマやトピックを設定することは可能であろう。日本においては英語を教育の言語とはしていない環境であるから、シンガポールと同様な教材作成を志向することはできないが、この考え方を軸に、言語使用の日常性をもう一つの要件として加えるならば、現状よりは余程児童・生徒のニーズに合った教材を構想する道が開けてくるのではないかと考えられる。

次に、示唆として今後の検討に加えたいのは、「人々のくらし」に焦点を当てた教材作成である。いわゆる「眼に見える文化」として具体物がよく取り上げられるが、これも重要な考慮すべきことがらであるが、より「異文化理解」にインパクトを持つのは、「眼に見えない文化」の部分である。すなわち、「人々の考え方、心情、信条、価値観」などである。これらが最も明らかな形で提示されるのは、対象文化のなかで育まれた「神話、民話、伝説、文学作品」である。近来の、文部省検定教科書から徐々にその姿を消しつつあるのは、実は、この部分である。これに関する調査の報告は稿を改めて行いたいが、最近の、特に中学校の英語教科書は、この点で「中和」されてきた觀がある。英語は世界のことば、という原理が強く出過ぎると、勢い「英語文化圏」とは距離をおくことになる。いわば、「伝達の手段」としてのコードの体系を「使いこなせるように」なればよいという思いがそうさせているのか、技術論に傾斜したシラバスの設計とそれに基づく教科書が主流となってきている。そして、皮肉にも、「ことばが使われる場面と機能を大切に」という牽引要素がこれに附隨している。英語教育の目的論とも大いに関わるが、ことばの学習には、それと不即不離の文化を等閑に付しては、真の意味での「ことばの学習」にはなり得ない。ことばを適切に使うことを達成するためには、そのことばを母語として使う人々の言語生活における「約束事」を知らなければならない。現在、日本の英語教育が向かおうとしている方向に、不安な材料があるとすればこの点である。少なくとも、学校教育のなかで、一つの科目として存在する限り、そこで学ぶ子供達の成長に資することが大前提として存在する。

シンガポールの PETsはこの点において、明らかに「英語文化」を意識して、この領域の素材を豊富に取り入れている。ことばの学習と並行して、そのことばを使う人々の間に流布している物語や言い伝えを学ぶことは、自然に学習対象言語を使う人々の「当たり前の生活」に触れることになる。そうなって初めて、その言語を使う人々の「ものの考え方」を理解し、「共感」できる素地が生まれる。「中和」された「ことば」のみを学習することは、その言語を使う人々の「思いや価値観」には全く関心を払うことなく、その言語を操作する、ということさえ出てくるであろう。これでは、外国語教育の目的からは大きく外れることになってしまう。

第3点は、PETSに盛られた極めて多くの国や地域の情報である。PETSは小学生用の教科書であるが、この中で扱われている外国は広汎に亘っている。この教材を通して、子供達は間違いなく、自分達の周りの世界が大きく広いことを実感するはずである。翻って、わが国の中学校の英語教科書に盛られている「外国情報」は、とてもPETSには及ばない。社会科では多くの外国に生徒の眼を向けさせているとの反論が出ようが、肝心なのは、「外国語としての英語」を学ぶコンテクストの中に「外国」がどれだけ取り入れられているかという点である。

4 終わりに

言語社会的な環境はシンガポールと日本では異なっているが、敢えて、シンガポールの小学生のための英語教科書を取り上げ、そのシラバスの構成について考察を試みた。シンガポールにおいては英語を「母語」と定義することはできないが、a first languageとして位置付ける中で、学校教育においてこれを「教える」ことを行っている。この要件の中に、「英語」を英語として捉える視点があるはずであるとの想定のもとに、PETSを概観した。

結果として、「言語」を習得させる道筋として、テーマを基盤としたシラバス構成が根底にあることが分かった。これは、外国語としての英語教育にも応用が可能ではないかとの見通しを得ることができた。A first languageという位置付けのもとで、半ば「母語として」、半ば「第2言語として」という両様の性格を持つ言語学習の有り様を捉えることを通して、学校教育の中で行う「言語学習」の最も重要な原則、すなわち、「子供達の成長」の過程に沿う形の教育原理が把握できた。

さらに、興味深い観察としては、テーマを中心に教材を構成しながら、その中で「言語技能」を育成するという方針が貫かれていることを見い出したことである。

また、もともと多文化、複合型社会であるシンガポールの小学生が、更に広い視野をもつべく多様な外国、地域のことを「ことばの学習」の中に含めていることが明らかになった。

これから日本における外国語としての英語教育を展望するにあたり、シラバス・デザインに関して一つの視点を得る示唆となった。現在使われている検定教科書について、「英語文化」をどのように提示しているかについて更に調査研究をする必要を感じた。単に、技術としての英語の学習に止まらず、異文化理解を具体的に視野に入れた教材の開発が今後求められることが必要である。

参考文献

- Andersen, H.G., and K. Risager, "Fremmedsprogsundervisningens socialiserende funktion, *Forskning i Fremmedsprogsprædagogik*, Statens humanistiske Forskningsrad, 1979. in Byram, 1989.
- Brumfit, C., *Communicative Methodology in Language Teaching*, C.U.P. 1984.
- Byram, Michael, *Cultural Studies in Foreign Language Education*, Multilingual Matters, 1989.
- Curriculum Planning Division, *English Language Syllabus (Primary)*, Ministry of Education, Singapore, 1991.

- Huhn, P., "Landeskunde im Lehrbuch: Aspekte der Analyse, Kritik und korrekiven Behandlung, in W. Kuhlwein & G. Radden (eds.), *Sprache und Kultur*, Gunter Narr, 1978. in Byram, 1989.
- Lamendella, John T., "General principles of neurofunctional organization and their manifestation in primary and nonprimary language acquisition, " *Language Learning*, 1977, 27(1), 155-196.
- 金田道和、「英語教育論考 ー目的論について その（1）ー」『研究論叢』第28巻、第3部、山口大学教育学部、1979(昭和53年)
- 金田道和、「新学習指導要領と英語科教育の目標 ー目的論について その（2）ー」『研究論叢』第49巻、第3部、山口大学教育学部、1999(平成11年)
- 金田道和、「英語の教育と英語教授 ー外国語（英語）の必修化を巡ってー」『英語教育研究』広島大学、2001、(印刷中)
- 中村紀久二、(監修)『文部省 学習指導書 第26巻 外国語編』大空社、1991(平成2年)
- 福田良子、「シンガポールの初等教育における英語教材」『中国地区英語教育学会研究紀要』1998, No.28, 73-82.
- 福田良子、「異文化理解のための題材分析ーシンガポール共和国の英語教科書を参考にー」第31回中国地区英語教育学会（広島大学）口頭発表資料、2000,9.